

○雪

廣島一少子

妾が文机に向ひ、何氣なく、外を眺めて居ますと、小さい小さい雪がちらちらと降つて居ます、お隣りの主人は布畦へ稼ぎに行かれるので、見送りの人々と出てられる、その後にお内儀さんが、三つになる兒を負ふて泣く／＼見送つてをられます。

○田舎者

山形たか子

山出しのお三日く、奥様！ 東京つて山形よりまだ廣い眼かな所で御座

いますつて？

○山百合

秋田一少女

一日、舊城に登る。不圖見付けたのは美しい山百合であつた。そこで町岬に根から堀り。家に持ち歸り。庭に植ゑ付けました。毎日其花に通つて居りましたが、悲哉、大雨の爲め。次第々々に枯れ始めた。

○男

廣島風露女

男の方は何故彼様に無情なのでせうね？ 女にはやれ操を守らぬの再婚をしたの何のと云ておいて御自分は奥様が亡なられると直後妻を貰て平氣だもの少しほんの操を守たら如何ですか。

○古き井戸

牛込本多しげ子

井桁は已に朽ちて、側には苦むした柄杓と闊伽桶一つ、上よりは蔽ひ被さる様に椿が、花は小さひが澤山咲いて居る、やがて白いのがぼちりと落ち、庵には思ひ出した様御經が始まつた、午になつたのである。

○二人の愛

高知岡村田鶴子

咲き笑ふ花の香を受けて、青々とした夢烟の中で若き夫婦が樂しげに語ひ乍ら働いて居る、他目も羨やましそう、而も彼等が手入れして居る宵夢の穏る頃は、二人の手に愛らしいベビーが、抱かれる事であろう！。

○肌着

岩代服部貞子

「オ、肩の凝つたこと……母様の肌着にとメレンスのはし切もて、はぎ合せた肌着の、數も丁度お年の数ほどの六十。今度だけはまあ若い者のくせに肩が凝るなんて……とお笑ひもなさるまい。

○何故

愛知紫清女史

東京の諸嬢の詩文が當選されると私口惜しくつて／＼たまらないのですひこんなものがと。もしも當地の人が出るともう嬉しくつて／＼はなされないのよ、何故でせう。

妾は今山麓美姫村指して下山しつゝ、越し路の暗黒に陰れて名も恐ろしき帶取池に付き、老僕興作が物語る神話の様な昔話をいぶかり乍ら、ふと見上れば銀鏡の夕月樹梢に懸つて亦千古を語る様。

○山ぶみの歸り

京都秋山すゝ蘭

『蠶生の花野を、十二三の少女子が、すみれか何かの、小さな花を持つて、虫に生れた蝶々でさえも、好きな花へと』と細う高う『飛んで行く』と遠くまで響て。

○蝶々

堺しぐれ

『蠶生の花野を、十二三の少女子が、すみれか何かの、小さな花を持つて、虫に生れた蝶々でさえも、好きな花へと』と細う高う『飛んで行く』と遠くまで響て。

○燕の巣

奈良津崎玉子

秋の内へいつのまにか燕が巣を作つて毎日々々出て行たり這いつたり、中々忙がしくして居る、子を可愛がつていつも餌をさがしに行つては躊躇する。つと食べさせてゐる、書齋で作文をして居ると窓の外へ來てチク／＼と

○水漬

播磨久子

雪のちら／＼降る寒い日でありました、先生のお宅で平家物語の宇治川の先陣の處を聞いて居ますと、先生はしきりに鼻の音をさせるので、そつとお顔を見ますと、お髭の中を水漬が。

▲破戒（島崎藤村作）

神田裏神保町上田屋發賣

新體詩に於ける藤村の技倅と功績は何人も認むる處なるが小説家としての藤村は世未だ其真價を知らざるもの多きが如し新破戒は氏が數年苦心の結果、初めて世に問ひたる大作にして、新平民の半生を材料とし親が「隠せ」と言ひし身の素性を隠し切れず遂に戒を破りて告白すると云ふ筋なるが叙述の筆路隱は最近我思想界に入來れるトルストイ一派の筆法を學び、少路隱くとも人間其ものを直ちに描寫せんと企てたる處、所謂寫實小説、家庭小説などは趣を一變し、眞に藝術的態度の發揮されたるものと言ふべく吾人は此「破戒」一篇を得て小説界の一轉機に向へる事を覺ると同時に「破戒」が此新氣運の先覺者として有力なる作たるを信するものなり四六版五百八十九頁、定價七十錢なり。